赠送MP3光盘

一番日本语菁华

阅读日本
日本人的情感世界

日本を読む『小説編』

请用这本书坐在灯下读日本
在领略日本文化、了解日本文学的同时
学习丰富多彩的日语，聆听地道纯正的日语

大连理工大学出版社

一番日本语菁华

阅读日本
日本人的情感世界

日本を読む『小説編』

大连理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

阅读日本:日本人的情感世界:汉日对照/一番日本语编辑部编.—大连:大连理工大学出版社,2010.4
(一番日本语)
ISBN 978-7-5611-5496-0

I.①阅… II.①一… III.①日语—汉语—对照读物 IV.①H369.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第062663号

大连理工大学出版社出版
地址:大连市软件园路 80 号　邮政编码:116023
发行:0411-84708842　邮购:0411-84708943　传真:0411-84701466
E-mail:dutp@dutp.cn　URL:http://www.dutp.cn
大连金华光彩色印刷有限公司　大连理工大学出版社发行

幅面尺寸:170 mm × 240 mm　印张:16.5　字数:211 千字
附件:光盘一张　印数:1～5000
2010年 4 月第 1 版　2010年 4 月第 1 次印刷

责任编辑:逄东敏　责任校对:王　璐
封面设计:董振巍

ISBN 978-7-5611-5496-0　定价:29.80 元

主编寄语

又一个樱花怒放的时节……

在日本，樱花是春天的使者，是花的神灵。四月的日本到处充满了樱花的味道。昨日还是花团锦簇、绚丽缤纷的樱花树，一夜之间就落英缤纷，碾落成泥了。樱花的凋落别有一番韵味。在我们看来或许有些许的悲情，有萦绕着久久不能散去的伤感。日本人的感觉却截然不同。当看到一阵风过后纷纷落下的樱花雪，赏花的日本人一定会快乐的欢呼。日本人就是喜欢樱花轰轰烈烈而生从从容容而去的生命态度，从一朵小小的樱花，日本人看到了生命的短暂，惟有只争朝夕……

生如夏花之绚烂，死如秋叶之静美。这是日本人崇尚的人生观。

文学承载着一个民族的文化。本书为读者呈现了一个精彩纷呈的日本文学世界。通过阅读这些文章，读者一定会对日本文化和日本人的情感世界有更深刻的理解和认识。读芥川龙之介的《橘》，您能看到贫穷人生环境中的人性的温暖；读《瘦小背影》和《不速之客》，您能体会到父爱的那种深厚和执著；读《傍晚的表白》，您能领悟到日本女孩子对老师的青涩懵懂的爱恋……读《步行街》，读到比奈子和故去的老公在熟悉的步行街相见，一如往常，您能对日本的灵异小说的体会入木三分。读罢全书，您或悲或喜的心里，一个个鲜活的人物形象浮现在您的脑海，一段段生动有趣的故事会留存在您的心底。如果您对日本人的情感世界有了更全面和直观的理解，这正是我们全体编辑人员想看到的结果。

春天的暖阳懒懒地射在窗台上，远处的樱花在阳光的照耀下，明艳动人。或许在明天的朝阳下你再去看她，所有的花瓣已无影无踪，只留下光秃秃的枝条和几片鲜嫩的细叶。

她走了，走的清清爽爽，了无牵挂……

2010年4月

目　录

梦里花落

蜜柑	2	橘
犬と僕と	10	我与那条狗
小さな背	17	瘦小背影
招かれざる客	25	不速之客
兄弟の手	32	兄弟之手
別れ	41	分别
十五年目の告白	47	十五年的告白
別れと夜桜	54	分别•夜晚的樱花
夕暮れの告白	61	傍晚的表白
初雪	67	初雪
橋	72	桥
冬	77	冬
卒業	85	毕业
独りよがりの恋	95	自以为是的恋爱
スケッチブック	105	写生本
納豆売りの少女	112	卖纳豆的女孩
あの頃、寮で、友達と	119	与舍友们的那段时光

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

子供時代の記憶 130 儿时的记忆
見えない瞳 141 看不清的眼睛
シンクロニシティ 148 心灵感应
なくした思い出 160 丢失的记忆

我心深处

福の神神社 168 福神神社
東京かめぐらし 177 东京的乌龟生活
カラコルムテンション 186 超级艳女
クリスマスツリーの後ろに 199 圣诞树的背后
白い猫と腕時計 213 白猫与手表
1／365の恋人 220 1／365的恋人
散歩道 231 步行街
紛失 239 失落
鬼ごっこ 249 捉迷藏

梦里花落

梦里的花正悄然地落下……

正是踏着樱花雪的时节，窗外落英缤纷，借着床头静静的灯光，

翻开书，跃然于纸上的那一个个温情的故事。

爱，是穿越时空的永远的话题。

蜜柑（みかん）

橘

我的感言与你分享

芥川龙之介作品的一个重要主题，在于对人性恶的发掘与鞭挞，让人从中痛切感到灵魂的尴尬和迷惘。惟其如此，《橘》中离家做工的小女孩从火车窗口抛给弟弟们的几个“被太阳染成暖色的橘子”，才在芥川阴沉沉的文学天穹划出了格外美丽的抛物线，也给读者心中留下了美丽的暖色。那是贫穷人生环境中的温暖。这篇《橘》堪称日本短篇小说永恒的佳作。

或曇った冬の日暮である。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに①電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はいなかった。外を覗くと、うす暗いプラットホームにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠え立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は外套のポッケットへじっと両手をつっこんだまま、そこにはいっている夕刊を出して見ようと云う元気さえ起こらなかった。

が、やがて発車の笛が鳴った。私はかすかな心の寛ぎ②を感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたたましい日和下駄の音が、改札口の方から聞こえ出したと思うと、間もなく車掌の何か云い罵る声と共に、私の乗っている二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へはいって来た、と同時に一つずしりと揺れて、徐に汽車は動き出した。一本ずつ眼をくぎって行くプラットホームの柱、置き忘れたような運水車、それから車内の誰かに祝儀の礼を云っている赤帽——そう云うすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく③後へ倒れて行った。私は漸くほっとした心もちになって、巻煙草に火をつけながら、始めて懶い④睚をあげて、前の席に腰を下していた小娘の顔を一瞥した。

それは油気のない髪をひっつめの銀杏返しに結って、横なでの痕のある皺だらけの両頬を気持の悪い程赤く火照らせた、如何にも田舎者らしい娘だった。しかも垢じみた萌黄色の毛糸の襟巻がだらりと垂れ下った膝の上には、大きな風呂敷包みがあった。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかり握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかった。それから彼女の服装が不潔なのもやはり不快だった。最後にその二等と三等との区別さえも弁えない愚鈍な心が腹立たしかった。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小

娘の存在を忘れたいと云う心もちもあって、今度はポッケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電燈の光に変って、刷の悪い何欄かの活字が意外な位鮮に私の眼の前へ浮んで来た。云うまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道の最初のそれへはいったのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間は余りに平凡な出来事ばかりで持ち切っていた。講和問題、新婦新郎、涜職事件、死亡広告——私は隧道へはいった一瞬間、汽車の走っている方向が逆になったような錯覚を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へ殆機械的に眼を通した。が、その間も勿論あの小娘が、あたかも卑俗な現実を人間にしたような面持ちで、私の前に坐っている事を絶えず意識せずにはいられなかった。この隧道の中の汽車と、この田舎者の小娘と、そうして又この平凡な記事に埋っている夕刊と、——これが象徴でなくて何であろう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であろう。私は一切がくだらなくなって、読みかけた夕刊を抛り出すと、又窓枠に頭をもたせながら、死んだように眼をつぶって、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であった。ふと何かに脅されたような心もちがして、思わずあたりを見まわすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けようとしている。が、重い硝子戸は中々思うようにあがらないらしい。あの皺だらけの頬は愈赤くなって、時々洟をすすりこむ音が、小さな息の切れる声と一しょに、せわしなく⑤耳へはいって来る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかった。しかし汽車が今将に隧道の口へさしかかろうとしている事は、暮色の中に枯草ばかり明い両側の山腹が、間近く窓側に迫って来たのでも、すぐに合点の行く事であった。にも関らずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下そうとする、——その理由が私には呑みこめなかった。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれ⑥だとしか考えられなかった。だから

私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手が硝子戸を擡げようとして悪戦苦闘する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るような冷酷な眼で眺めていた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうばたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、煤を溶したようなどす黒い空気が、俄に息苦しい煙になって、濛々と車内へ漲り出した。元来喉を害していた私は、手巾を顔に当てる暇さえなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、殆息もつけない程咳きこまなければならなかった。が、小娘は私に頓着する気色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戦がせながら、じっと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明くなって、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで来なかったなら、漸咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかったのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道を辷りぬけて、枯草の山と山との間に挟まれた、或貧しい町はずれの踏切りに通りかかっていた。踏切りの近くには、いずれも見すぼらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであろう、唯一旒のうす白い旗が懶げに暮色を揺すっていた。やっと隧道を出たと思う——その時その蕭索とした踏切りの柵の向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押し⑦に並んで立っているのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃って背が低かった。そうして又この町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分からない喊声を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢よく左右に振ったと思うと、忽ち心を躍らすばかり暖な日の色に染まっている蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送った子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

供たちの上へばらばらと空から降って来た。私は思わず息を呑んだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴こうとしている小娘は、その懐に蔵していた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切りと、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落する鮮な蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はっきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、或得体の知れない朗な心もちが湧き上って来るのを意識した。私は昂然と頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返って、相不変皺だらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱えた手に、しっかりと三等切符を握っている。… 私はこの時始めて、云いようのない疲労と倦怠とを、そうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅に忘れる事が出来たのである。

橘

冬天一个阴沉沉的黄昏。我坐在横须贺始发的上行线二等列车的角落里，怔怔等待发车的笛声。稀奇的是，早已亮起电灯的车厢除了我别无乘客。窥看外面，昏暗的月台上今天也少见地连个送行的人也没有。只有关在笼子里的一只小狗不时伤心地叫一声。而这些同我那时的心绪竟那般吻合，吻合得不可思议。我脑海中难以言喻的疲劳和倦怠投下宛如雪云密布的天空那样沉沉的阴影。我双手一动不动插进外套口袋，甚至掏出口袋里的晚报的精神都提不起来。

不久，发车笛响了。我心里生出一丝宽慰，头靠向后面的窗框，似等非等地等待眼前的车站一点点后退。不料没等车开，一阵刺耳的短齿木屐声从剪票口那边传来。稍顷，我乘坐的二等车的门连同列车员的喝斥声，“咣啷”一声开了，

一个十三四岁的小姑娘慌慌张张闯了进来。与此同时，列车重重地晃了一下，徐徐开动了。一根根切开视野的月台立柱、仿佛被遗忘的运水车、以及向车厢里给小费的某人致谢的红帽子搬运工——所有这些都在扑打车窗的煤烟中恋恋不舍地向后面倒去。我终于舒了口气，点燃一支烟，这才抬起懒洋洋的眼睑，瞥了一眼坐在对面席位的小姑娘。

没有光泽的头发向后梳成两个圆圈，满是横向皲裂纹的两颊通红通红的，甚至红得令人不悦，一个典型的乡下女孩儿。而且，垂着带有污痕的淡绿色围巾的膝盖部放一个很大的包袱。搂着包袱的长了冻疮的手不胜珍惜地紧紧攥着一张三等红色车票。我不中意女孩儿俗气的脸形。此外她衣着的不洁同样让人不快。最后，就连二等和三等的区别也分不清的愚钝也令我气恼。所以，也是因为心情上想忘掉这个小姑娘的存在，点燃香烟的我这回把衣袋里的报纸不经意地摊开在膝头上。这时，落在晚报版面上的天光突然变成了电灯光，几栏印得不清楚的铅字意外鲜明地浮现在我的眼前。不用说，列车进入了有很多隧道的横须贺线的第一个隧道。

但是，看遍给电灯光照亮的晚报所有版面，也还是排遣不掉我的烦闷，世间发生的清一色是再平凡不过的琐事。讲和问题、新娘新郎、渎职事件、讣告——在列车进入隧道的一瞬间，我产生一种列车仿佛往相反方向行驶的错觉，同时几乎机械地一则则浏览这些枯燥无味的报道。这时间里我也对小姑娘以俨然世间鄙俗的化身坐在我面前的这点照样耿耿于怀。隧道中的火车、这个乡下小姑娘、以及连篇累牍全是琐事的晚报——这不是象征又是什么呢？不是费解的、低等的、无聊的人生象征又是什么呢？一切都让我感到心烦。我把刚看的报纸扔开，又把头靠在窗框上，死一般闭起眼睛，迷迷糊糊打起盹来。

又有几分钟过去了。我蓦然觉得被什么惊了一下，不由四下环视。原来那个小姑娘不知何时移来我身边，再三再四要开车窗。但看样子很难把沉重的车窗推上去。那满是皲裂的脸颊愈发红了，不时抽鼻涕的声音同低微的喘息声一起急切切传入我的耳朵。不用说，这对我也是能多少唤起恻隐之心的。但是，火车即将进入近隧道口这点，即使根据暮色中惟有枯草发亮的两侧山坡逼近窗口也是显而易见的。尽管如此，这小姑娘偏偏要把关好的窗扇打开——我不明白她何以如此。在我眼里，只能看成不过是这小姑娘心血来潮罢了。所以，我心底依然积蓄

阴险的感情，以冷酷的眼神望着那双长冻疮的手千方百计想抬起玻璃窗的情形，但愿她永不成功。很快，火车发出凄厉的声音闯入隧道，而小姑娘想打开的窗也随之“啪嗒”一声落了下去。旋即，夹杂着煤烟的黑色气浪从这方孔中扑进，刹那间化作令人窒息的烟，滚滚涌满车厢。本来嗓子就不舒服的我还没等用手帕捂脸，就被烟扑了一脸，咳嗽得几乎透不过气。而小姑娘却一副满不在乎的样子，脑袋伸出窗外，任凭黑暗中吹来的风摇颤着两个圆圈的发型下面的鬓毛，一动不动地注视火车前进的方向。那身姿在煤烟和电灯光中显现出来的时候，窗外眼看着明亮起来。假如没有泥土味儿、枯草味儿和水味儿凉瓦瓦涌进来，好歹止住咳嗽的我肯定把这不相识的小姑娘劈头盖脑骂一顿，让她把车窗按原样关好。

但火车这时候已顺利滑出隧道，驶上夹在长满枯草的两山之间景象萧条的城郊一个铁道口。铁道口附近一座接一座密密麻麻挤着茅草房和瓦房，无一不显得穷困潦倒。其间只有大约是铁道口值班员挥动的一面白旗有气无力地在暮色中摇晃。那时——大约是驶出隧道的时候——我发现冷冷清清的道口栅栏的对面紧挨紧靠地站着三个红脸蛋男孩儿。个子都矮矮的，就好像给阴暗的天空压矮的。身上衣服的颜色也同这城郊凄凉的风物一个样。他们一面仰看行驶中的火车，一面一齐举起小手，鼓鼓地翘起楚楚可怜的喉节，拼命发出听不出什么意思的喊声。事情发生在这一瞬间：从窗口探出上半身的那个小姑娘，一下子伸出长冻疮的手使劲儿左右挥舞，五六个被太阳染成暖色的令人动心的橘子随即从天空朝着给火车送行的孩子们头上“啪啪啦啦”落下。我不由得屏住呼吸。刹那间恍然大悟，小姑娘——大概外出做工的小姑娘为了慰劳特意来铁道口送行的弟弟们而把怀里的几个橘子从窗口扔了出去。

染着暮色的城郊铁道口、像小鸟一样喊叫的三个孩子、以及向他们头上落去的橘子鲜艳的颜色——这一切都一瞬间在车窗外掠过，但这光景在我的心头留下了分外清晰的烙印。我意识到，一种不明所以的豁然开朗的心情涌了上来。我昂然抬起头，就像看另一个人一样看着那个小姑娘。不觉之间小姑娘已返回我对面的座席，依然把满是皲皱的脸颊伏在淡绿色毛围巾里，搂着大包袱的手里紧紧攥着一张三等车票……这时我才得以暂时忘却难以言喻的疲劳和倦怠，忘却费解的、低等的、无聊的人生。

词海拾贝

①とうに		很早，早已
②寛ぎ	【くつろぎ】	舒畅，舒适，轻松自在
③未練がましい	【みれんがましい】	依恋，恋恋不舍
④懶い	【ものうい】	懒懒的，无精打采，萎靡不振
⑤せわしない		忙忙碌碌，无休无止
⑥気まぐれ	【きまぐれ】	心血来潮，喜怒无常，朝三暮四
⑦目白押し	【めじろおし】	拥挤不堪，一个挨着一个

犬(いぬ)と僕(ぼく)と

我与那条狗

我的感言与你分享

假如没有无聊的争执，假如没有无情的奚落，假如没有冷酷的离弃，假如没有……

生活中应有的是足够多的温柔关爱，足够多的真诚安慰，足够多的动人亲情，足够多的……

亲情的阳光照亮每一条回家的路，亲情的问候温暖每一颗孤独的心，亲情的音符传遍每一寸土地。

田んぼの端の通学路にある、古い造りの一軒家。そこに、そいつはいた。

砂で薄汚れた体。ぼさぼさの毛並み。やにの溜まった目。いつもふにゃりと垂れた尾。短い鎖に繋がれたその老犬は、玄関横の日陰で、いつも寝そべって①いる。名前も知らないけれど、毎日小学校へ通うためにその家の前を通る僕は、そいつの事が気になっていた。

時々、飼い主が家を出入りするのを見ることがある。その時だけ、そいつは地べたから体を起こしてきちんとお座りし、尾をぱたぱたと振っていた。でも、飼い主は犬を撫でてやるどころか目を向ける事すらしない。そんな主人を見送るそいつの目は、それでも、まっすぐできれいなものだった。主人の事が好きなんだな、と僕は感じた。

僕がそいつの事を知ったのは小学校に入学してからだが、少なくとも四年生になるその時まで、そいつはそんな調子でずっとそこに居た。干あがりそうな暑い夏の日も、降り積もる雪に沈む寒い冬の日も。散歩に連れて行かれているところさえ見た事がない。僕の知るもっと前には、愛されていた頃があったのかもしれない。その時の事を覚えているからなのか、そいつは、主人の姿を見る度に嬉しそうな様子を見せていた。たとえ今、自分に愛情が向けられていなくとも。

僕は、学校から家であるアパートに帰るのがいつも憂うつだった。両親は共働きで、帰ってもどうせ誰も居ない。両方とも帰ってくる時間は不規則で、僕の家族は、すれ違いばかり。そしてしばらく前から、両親の喧嘩がよく目につくようになって。

そんなぴりぴりした空気も嫌だったが、何より僕が嫌だったのは、両親が、僕をほとんど相手してくれなくなった事だった。それなりに勉強ができ、特に問題を起こす事もなく、僕は両親にとって手のかからない子どもらしい。だからなのだろうか。両親は、僕の方を見なくなった。無関心、という名の切れ味の悪い刃は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com